

【用語】啓上―申し上げること　かへほう―世話をする　としこし―節分の夜

【解説】江戸の豪商として知られた塩原太助は、寛保三年（一七四三）二月、利根郡羽場村下新田（新治村）百姓角右衛門の長男として生まれたが、宝暦十一年（一七六一）頃に村を出て、明和二年（一七六五）からは江戸南伝馬町の味噌屋太郎兵衛へ奉公した。その後、神田佐久間町の薪炭問屋山口屋善右衛門方へ移り、二〇年余り精勤して金一五〇兩と屑炭数百俵を蓄え、本所相生町で独立したという。炭の安さと「はかり売り」という商法があたり、利潤は順調に伸び、「本所に過ぎたるものが二つある。津軽屋敷と炭屋塩原」と呼ばれるほどの豪商となった。

この書状は年次不詳であるが、節分の日（十二月二十三日）に書かれたもので、太助から下新田の原沢太七・源次へあてた礼状である。原沢家は太助の実家の真向かいで、旗本菅谷氏知行の下新田の名主や年寄を務めたため、公用で江戸へ出ることがあったと思われる。書状では太助宅を訪問した際に実家へ届け物を依頼したことへの礼や、母親の面倒を依頼していることなどがわかる。また、寿山と号し、俳句をたしなんだ太助の祝句もあり興味深い。なお、原沢家は太助が三国街道の中山峠に旅人の休息所として設置した接待茶屋の世話もしていた。